

海外返還廃棄物

受け入れに期待と批判

事業者「安全最優先で」

反対派「県民不安増幅」

海外から返還される低レベル放射性廃棄物について、三村申吾青森県知事が受け入れを表明した19日、国や事業者は「安全を最優先に取り組み」と事業推進に期待の声を寄せた。一方、反核燃団体などは「県民の不安を増幅させる」などと強く批判した。

(一面に関連記事)

吉彦社長は「受け入れと貯蔵は安全確保を最優先に進めていく」と、それぞれ談話を出した。

17日に受け入れを表明した六ヶ所村の古川健治村長は「知事には立地村の立場を重く受け止めていただいた。国の新年度予算の概算要求が大詰りを迎えており、地域振興を考えると、知事の表明のタイミングは時宜を得ている」と評価した。

◇海外返還廃棄物をめぐる主な経緯

2010年
3月
6月
7月
8月10日

- ・直嶋正行経済産業相が三村申吾青森県知事に受け入れ要請。三村知事、検討する方針表明
- ・専門家による県の検討会初会合
- ・検討会が4回目の会合で「安全性確保できる」との結果をまとめる
- ・検討会が県に報告書提出
- ・国、電気事業連合会、日本原燃がの要請を受け「青森県を最終処分場にしない」との確約書提出
- ・県が県議会と県民向けの説明会開
- ・県が県内の各団体と市町村長向け

直嶋正行経済産業相は「上、非常に意義深い。最終処分地の早期選定が放射性廃棄物の貯蔵管理られるよう、不返転の決める上で受け入れは大変重要」、日本原燃の川井

東北大研究グループ

脳の機能を解明

人間の脳は、動いている物体と一緒に音を聞くと、物体が止まっても、その音を聞くだけで動いたように錯覚することを、東北大電気通信研究所の寺本渉研究員(知覚心理学)らの研究グループが突き止めた。脳はわずか3分間で音色と動きのパターンを認識し、効果が3カ月以上も持続した。映像技術に応用すれば、高機能なスピーカや大画面テレビがなくても、迫力や臨場感のある映像を再現できる可能性がある。

グループは24〜57歳の6人に対し、暗室で画面中央の赤い点を見てもらいながら、画面の端に白い点滅光を二つ並べて表示。高音を流した時は右の白い点、低音の時は左の点滅する映像を3分間見せた。

視聴後、白い点滅光を1カ所に固定して、高音と低音を交互に聞かせたところ、6人全員が「左右に動いた」と回答。少なくとも3カ月以上は同様の反応を示した。

音を聞かせずに光だけを点滅させたり、画面との距離を変えたりするなど、条件を変えるとほとんど動いたとは認識しなかった。動いたように見えるのは、事前に体験した視野の特定の場所での、特定の音を聞いた時だけだった。

脳は異なった感覚器官からの情報を統合する機能を持つ。車が走っている音を聞くと、走行する車の動きが想像できるように、経験から視覚と聴覚が頭の中で結び付く。

研究成果は、映像技術への応用、開発が期待される。実用化できれば、事前に野球のボールの動きに合わせて音の変化を学習すると、次に視聴した時にスピード感が増した動きを楽しめるようになる。

寺本研究員は「自然な音と映像で、複雑な場面も同様に認識できるかどうか研究を進めたい」と話している。

成果は立教大現代心理学部の日高聡大助教(知覚心理学)らと共同で20日、米オンライン学術誌「プロスワン」に掲載される予定。

物体の動き音で認識

学習3分 効果3ヵ月 止まっても目が錯覚

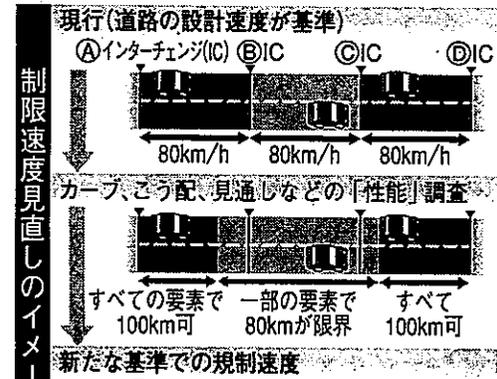
「高速」制限速度

警察庁 道路性

警察庁は19日、全国の高速道路と自動車専用道路で、カーブの曲がり具合や二つ配、見通せる距離など地点ごとの「道路の性能」を細かく調べた上で、規制速度(制限速度)の緩和を進める方針を決めた。年明けにも引き上げが始まる見通し。

これまでの道路設計速度を基準に、おおむねインターチェンジ(IC)間を単位に決めていた制限速度を、調査結果に基づき柔軟に決定。すべての要素が設計速度以上のスピードの走行に耐えられると判断された区間は、ICに関係なく法定で最高の時速100キロを上限に見直す。

同庁の通達に基づき全



警察庁は19日、全国の高速道路と自動車専用道路で、カーブの曲がり具合や二つ配、見通せる距離など地点ごとの「道路の性能」を細かく調べた上で、規制速度(制限速度)の緩和を進める方針を決めた。年明けにも引き上げが始まる見通し。

これまでの道路設計速度を基準に、おおむねインターチェンジ(IC)間を単位に決めていた制限速度を、調査結果に基づき柔軟に決定。すべての要素が設計速度以上のスピードの走行に耐えられると判断された区間は、ICに関係なく法定で最高の時速100キロを上限に見直す。

同庁の通達に基づき全